長野県短期大学紀要　第72号　2017年
Journal of Nagano Prefectural College, No. 72, 2017

【論文】

ボランティア学習が学生の社会意識に及ぼす影響[1]
The Effects of the Learning about Volunteer Activities on the Student's Social Consciousness

田戸岡好香[2]・石井　国雄[3]・樋口　　収[4]
Yoshika TADO'OKA，Kunio ISHII，and Osamu HIGUCHI

要旨

本研究は，ボランティア学習が学生のさまざまな社会意識にどのような影響を及ぼすのかを検討した。調査の結果，先行研究と同様に，小中高校でのボランティア経験は，短期大学入学後のボランティア活動には影響を及ぼしていなかった。ただし，ボランティア経験が多い学生ほど，関心領域は広く，意識を実践に結びつける介入が必要なことが示唆された。また，高齢者関連のボランティア活動の実践が，高齢者への潜在的態度に及ぼす影響を検討したところ，ボランティア経験の多い学生ほど，高齢者を援助すべき対象と捉えていることが示唆された。ボランティア学習の効果は社会的望ましさの影響を排除することが難しいため，本研究の知見は新たな効果測定法の提案にもつながると考えられる。

キーワード：ボランティア，授業実践，高齢者ステレオタイプ，潜在的態度

はじめに

ボランティア活動は，一般的には「自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為」とされており，活動の性格として，「自主性（主体性）」，「社会性（連帯性）」，「無償性（無給性）」等があげられる（岡本, 2005）。わが国では, 1993年に厚生省より告示された「国民の社会福祉に関する活動への参加の促進を図るための措置に関する基本的な指針」により，国民の自主性，自発性を尊重しつつ，誰でも，いつでも，気軽にボランティア活動に参加できるよう，ボランティア活動への社会的評価の向上が図られている。2016年度の総務省の調査では, 1年間に「ボランティア活動」を行った人は2943万8千人で，国民の26.0%が活動に関わったことを示している。

こうした取り組みの一環として，近年，教育機関では学生がボランティア活動に関わることが推奨されるようになっている。学習指導要領によれば，学生におけるボランティア活動の意義は，ボランティア活動を通して学生が社会奉仕の精神を養うことにある。実際，ボランティア活動に参加したことのある学生は，年々増加傾向にあり，日本私立大学連盟が2014年に行った調査では，大学入学後にボランティア活動に参加した事のある学生の割合は28.8%となっており（日本私立大学連盟, 2015），学生が強い関心を持っていることがうかがえる。

本研究の目的

このように，学生におけるボランティア活動はますます社会的，政策的に注目されるようになってきている。そうした中で，ボランティア教育にあたって，どのような学生がボランティア活動に関わっており，関わることでどのような影響をもたらすのかを考えることは重要であろう。本研究では，長野県短期大学で行われた『ボランティア論』の授業実践をもとに，以下の三つの観点からボランティア学習について検討した。

一点目に，過去のボランティア経験の影響を検討する。先述のように，学習指導要領では，ボランティア経験を通して学生が社会奉仕の精神を養うことを目的としている。実際，箱井・高木（1987）では，ボランティア活動などの援助行動を経験することが，弱者を救済するべきであるという援助規範意識を高めることを示している。しかし一方で，荒川・保住・吉田（2006）では，教育課程の中でのボランティア経験が必ずしもその後の活動を増加させてはいなかったという結果も示している。そこで，本研究

[1] 本研究はJSPS科研費17K13910の助成を受けた。ボランティア活動の実践にあたり，長野市社会福祉協議会ボランティアセンターの小宮山綾乃氏と小林ひと美氏にご尽力いただきました。また，本調査の実施にあたり，首都大学東京の沼崎誠先生，松崎圭佑先生，帝京大学の大江朋子先生にアドバイスをいただきました。記して感謝致します。
[2] 長野県短期大学多文化コミュニケーション学科国際地域文化専攻
[3] 清泉女学院大学人間学部心理コミュニケーション学科　[4] 明治大学政治経済学部政治学科

では，小中高でのボランティア経験の有無が短大での活動の有無に影響するかを検討することとした。

二点目に，ボランティア論受講者の心理的特性として感染症回避傾向に注目した。ボランティア活動では，普段では出会わないような，自分とは異なる集団に属する他者と出会うことができる。そうした中で，新しい仲間を得たり，自分の力量を試すなど自己実現をしていくことが昨今のボランティアを支える動機として注目されている（田尾, 2001）。一方で，外集団との接触を好む程度には個人差があり，近年では感染症回避傾向が集団間接触に影響を及ぼすことが指摘されている。私たちヒトには，生存確率を高めるために，保菌者や保菌物を検知し，感染症を回避しようとする行動免疫システムが備わっている（Schaller & Duncan, 2007）。ただし，病原菌は目に見えず，保菌者を特定することはできない。そのため，自分とは文化や規範が異なる外集団成員を過度に回避するエラーが生じることがある。こうした回避傾向には個人差があり，感染症に対する嫌悪傾向が高い場合，外集団に対する回避的な行動をとることが知られている。よって，ボランティアのような外集団との接触を積極的に行おうとする人は，感染症に対する回避傾向が低い可能性があるだろう。

三点目に，ボランティア活動において他者と触れ合うことが外集団に対するイメージに及ぼす影響を検討する。先述したように，ボランティア活動の特徴のひとつが，多様な人々との出会いである。時に，私たちは自分とは立場の異なった人に対して，その人が所属する集団のみに基づいて固定的なイメージ（ステレオタイプ）を抱いたり，否定的に捉えてしまうことがある。しかし，そうした外集団と接し，ともにひとつのことに取り組む中で，否定的なイメージが低減することが知られている（接触仮説；Allport, 1954）。例えば，本授業では，高齢者や子供，障害者，動物といったさまざまな対象と関わるボランティア活動があり，それぞれのイメージが変化する可能性があるだろう。ただし，すべての態度を検討することは難しいため，本研究では，特に高齢者に対する態度を取り上げて，高齢者に接する活動をした人とそうでない人を比較し，イメージの変化を検討することとした。

現代の日本では高齢化がますます進んでおり，2016 年度において，総人口に占める 65 歳以上人口の割合は 27.3％にのぼっている（内閣府, 2017）。こうした現状から，エイジズム（高齢者差別）は，レイシズム（人種差別），セクシズム（性差別）と並び，社会的な問題となっている。昨今の核家族の増加に伴い，子どもや若者が高齢者と接する機会が少なくなっていることはエイジズムのひとつの要因と考えられる。そこで，エイジズムを低減するために，世代間交流の重要性が指摘されているが（Levy, 2016），高齢者と接するボランティア経験は高齢者に対するイメージに実際に変化を及ぼすのだろうか。このことに示唆を与える研究として，藤原ら（2007）では，高齢者が児童に絵本の読み聞かせをするボランティアが，高齢者イメージに及ぼす影響を検討している。調査の結果，一般的には高齢者イメージは児童の成長とともに低下する傾向があるが，読み聞かせボランティアとの交流経験が多い児童は肯定的なイメージを維持する可能性が示唆された。これらの結果が示唆するのは，対象との交流をすることで偏見を低減する可能性である。

ただし，藤原ら（2007）では，高齢者がボランティアをする側であり，そのことが高齢者イメージを改善させた可能性がある。ボランティアのケースとして多い高齢者施設の訪問という形式の場合にも，高齢者イメージの好転が見られるのかを検討することは重要だろう。加えて，藤原ら（2007）では，高齢者のイメージを児童が印象評定しており，社会的望ましさの影響を排除することが難しかったと考えられる。すなわち，児童はよく交流する高齢者に対して悪く言うことは社会的に望ましくないことだと考え，偏見を抑制した可能性があるだろう。そこで，本研究では，高齢者に対する潜在的な態度を測定することを試みた。

社会心理学では，伝統的に，リッカート法などによるいわゆるアンケート形式の態度測定がされてきた。例えば，「高齢者は能力が低いと思いますか」といった質問に，「1：そう思わない―5：そう思う」といった数字で回答する形式である。こうした方法では，回答者が自分の回答を意識することができる。そのため，社会的に望ましい回答をしようと反応を統制してしまい，回答者の本心を聞き出せない可能性がある。

他方，潜在的測定では，回答者が自分の回答の意味を意識できないような方法を用いる。そのため，参加者が反応を統制できないことが多く，社会的望ましさの影響を受けにくいとされている。例えば，代表的な潜在的手法として，潜在連合テスト（Implicit Association Test; IAT）がある（Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）。この課題では，カテゴリ分類判断の容易さ，困難さの違いをもとに，対象に対してどのような知識の連合が存在するのかを測定する。一般的に，高齢者には「能

力は低いが温かい」というステレオタイプがある（Fiske, Cuddy, Glick & Xu, 2002）ため，本研究では，「高齢者」と「能力の低さ」や「温かさ」という概念が結びついているかを検討することとした。こうした手法を使用することで，社会的望ましさに影響されずに，高齢者へのイメージを測定することができると考えた。

本研究の概要

本研究では，長野県短期大学のボランティア論を受講した2年生の学生を対象として，ボランティアの基礎概念を学び，ボランティア活動を行うことが，受講者のさまざまな意識にどのような影響を与えるのかを検討した。具体的には，授業初回および授業最終回に，受講者のさまざまな意識やボランティア経験を問う調査を行い，その変化を検討した。加えて，授業最終回では，高齢者に対する潜在的態度をIATによって測定し，ボランティア活動が高齢者のイメージにどのような影響を及ぼしたのかを検討した。

方法

調査参加者

授業受講生は45名（男性3名，女性42名）であった。ボランティア論は2年次対象の全学共通科目であり，幅広い学科専攻の学生が履修した。事前調査に回答した参加者は44名（男性2名，女性42名，平均年齢19.05歳, $SD = 0.21$）であり，事後調査に回答した参加者は41名であった（男性3名，女性38　名，平均年齢19.34歳, $SD = 0.53$）。

手続き

ボランティア論の受講者を対象に，授業初回に事前調査を行い，授業最終回に事後調査を行った。事前調査では質問紙調査を実施し，事後調査では高齢者に対する潜在的態度を測定するためにパソコンを用いてIATを行った後に，質問紙調査を実施した。以下では，時系列に従い，事前調査，講義全体の流れ，事後調査の順に詳細を示す。

表1. 授業スケジュール

	タイトル	概要
1	ボランティアの基本理念	ボランティアとは何か，基本的な定義と関連概念について **☆事前調査の実施**
2	ボランティアを支える精神①	なぜ人はボランティアを行うのかといった基本的な問いについて， 心理学の動機付け理論などの知見を元に講義
3	ボランティアを支える精神②	障害者支援を例に『自立』という概念について
4	地区の現状と課題	地区での課題や，ボランティアが果たす役割について 外部講師：地域包括支援センターおよび住民自治協議会
5	ボランティアの実践に向けて①	ボランティアをする際の心構え
6	ボランティアの実践に向けて②	訪問先の理念の理解および訪問準備
7	ボランティアの実践	別表2のとおり，ボランティア活動を行った
8	ボランティアの実践	
9	活動の振り返り①	活動成果の発表準備，施設へのお礼状の作成
10	活動の振り返り②	発表会
11	災害ボランティア①	東日本大震災時のボランティア活動について 外部講師：長野フリースタイルな坊さんたちの会
12	災害ボランティア②	災害時の人の心理，立ち直り過程の理解や，被災者への接し方について カウンセリング技法など心理学の観点から講義
13	災害ボランティア③	物資による被災地支援の体制と手順，風評被害について
14	国際ボランティア	外部講師より，チェルノブイリの現状の講話 チェルノブイリの子どもたちにクリスマスカードを送る活動
15	まとめ	まとめとボランティア活動の継続について　**☆事後調査の実施**

表 2. ボランティアの活動先と人数

訪問先	人数（名）	主な活動内容	活動分類
デイ・サービス	14	施設利用者と折り紙で紫陽花を作成する，紙芝居や歌の披露	高齢者関連条件
地区活動	6	お茶のみサロンの準備，歌の披露，健康体操の実施補助	
保育園	12	おやつの配膳，昼寝布団の片付け，子供の遊び相手	統制条件
障害者施設	6	箱折りやキーホルダーなど内職業務をしながら勤務者と交流	
猫の保護施設	6	ケージの掃除，びんずる市で猫グッズの販売，譲渡会の参加	
その他	1	ハピスポひろばという交流広場の運営の手伝い	
合計	45		

事前調査

2017 年 4 月の第 1 回授業において，受講者の希望や属性を知るために，事前アンケート調査を行った。この調査は，受講生の一般的な傾向を知るために行い，授業資料として利用すること，また研究目的として用いられる場合があることを伝えた。ただし，回答は個人情報がわからない状態で，数値として処理されることを教示した上で，回答を依頼した。

初めに，人道主義－平等主義尺度 10 項目（Katz & Hass, 1988）を日本語訳した高・雨宮（2013）の尺度を用いた。「人はすべての他者に対して親切であるべきだ」などの 10 項目について，6 件法で回答を求めた（0：強く反対する－5：強く賛成する）。

続いて，福川・小田・宇佐美・川人（2014）らの感染脆弱意識（PVD）尺度に回答を求めた。この尺度は 2 因子から構成されていた。一つ目が，自分の感染症へのかかりやすさの自覚に関する易感染性であった。二つ目が，不衛生な物など病原体が存在しうる物に接触することへの嫌悪感に関する感染嫌悪であった。易感染性の 7 項目（例：「風邪やインフルエンザなどに感染しやすい」）および感染嫌悪の 8 項目（例：「誰かと握手したあとは，手を洗いたくなる」）について，7 件法で回答を求めた（1：非常にあてはまらない－7：非常にあてはまる）。なお，ボランティア論の受講生の特徴を知るために，PVD 尺度についてのみ，ボランティア論を受講していない 2 年生 79 名（男性 3 名，女性 76 名，平均年齢 19.09 歳，$SD = 0.29$）に回答を求めた。

続いて，祖父母との同居経験について，「現在同居している」，「過去に同居していた」，「全く同居経験がない」から選択してもらい，同居経験がある場合には，その期間も尋ねた。

続いて，ボランティア活動の経験について尋ねた。小学校，中学校，高校，短大入学後について，ボランティア活動を行った場合には，該当する時期を選択し（複数回答可），活動の内容やきっかけを自由に記述してもらった。

また，ボランティアについて，活動領域を提示し，関心のある活動領域すべてを選択するよう求めた。活動領域は，環境，子ども，まちづくり，心理，文化，スポーツ，国際，社会福祉，被災地支援，社会貢献の 10 領域であった。

その他，授業内容に関する質問をし，最後に，性別，年齢といった属性に回答を求めた。

授業内容

本授業の到達目標は，『ボランティアに関する基本的な理論や知識を正しく有すること。加えて，受講者がボランティア活動への意識を高め，活動のきっかけを掴むこと』とした。こうした目標のもと，授業は，大きく分けて講義，活動実践，講義という 3 パートで構成されていた。各回の詳細な説明は表 1 としてまとめた。

前半はボランティアの定義や基本的な概念の説明をし，地区の現状や課題を把握した。この際，ボランティアをする側の視点だけでなく，援助される側の視点や心理も取り込んだ講義を行った。例えば，ボランティアとは単に誰かを手助けすることだけを意味するのか，自立とは何なのかといった点に着目した。講義の中では，本授業の担当教員だけでなく，外部講師を招き，地区やボランティアの現状など，生の声を講義してもらった。

その後，地区においてボランティア実践を行った。長野市ボランティアセンターとの協力の元，訪問先の選定，活動内容を事前に吟味した。また，授業開始前に活動先の代表者を交えて事前打ち合わせをする中で，活動に求められているものをヒアリングした。受講生は，1～7 名の班ごとに，施設への訪問や地区の活動に参加した。訪問先について授業内で説明し，学生が主体的に選択した。いずれの学生も希

望する施設に訪問することができた。活動前に，学生は訪問先の理念や対象者を調べ，十分に理解した上で活動を行った。具体的には，高齢者を対象としたデイ・サービス施設への訪問，お茶のみサロンや健康体操といった地区活動，保育園，障害者の就労継続支援事業所，捨て猫を保護するシェルター施設などに訪問し活動を行った。なお，活動内容は表2に示したとおりであり，活動内容はボランティアセンターの職員と相談しながら事前に決定，準備した上で訪問した。活動後は，その成果を発表会において班ごとに発表し，お礼状を執筆した。なお，期末レポートでは，活動を通して見えてきた，ボランティアの意義や社会的課題について記述した。

授業後半では，災害ボランティアや国際ボランティアといった，地区内に収まらないさらに大きな視点からボランティアを捉え，講義を行った。

事後調査

授業の最終回に，ボランティア学習の効果を検討するために，高齢者への潜在的態度の測定（IAT）および事後アンケート調査を行った。

IATの実施　IATのプログラム制御にはMillisecond Software社のInquisit4.0を用いた。IATには2タイプあり（能力IAT，人柄IAT），実施の手順は同じだが，用いられる刺激項目がそれぞれ異なっていた。能力IATでは，高齢者関連語（e.g., 老人，高齢者），若者関連語（e.g., 若者，青年），低能力語（e.g., 自信のない，弱い），高能力語（e.g., 有能な，決断力のある）を刺激項目として用いた。人柄IATでは，高齢者関連語，若者関連語，冷たさ語（e.g., 冷たい，そっけない），温かさ語（e.g., あたたかい，親しみやすい）を用いた。なお，高齢者・若者関連語は石井・宇賀神（2014）に基づいて，能力・人柄関連の単語は沼崎・小野・高林・石井（2006）を参考に選出した。

参加者は能力IATの後に人柄IATを行った。IATは，黒色の画面の中心に白色で単語が呈示され，その単語が指定されたカテゴリのうちどれに含まれるかをキー押しで判断する課題であった（図1参照）。キー押しをすると，800msの試行間隔をおいて次の試行となった。IATは7つのブロックによって構成されており，実施手順の詳細は付録に示した。能力IATを例にすると，練習課題の後，高齢者・高能力ブロックでは4カテゴリの項目が呈示され，高齢者または高能力語であった場合はFキー，若者または低能力語だった場合はJキーを押すことで判断した。他方，高齢者・低能力ブロックでは，カテゴリが入れ替わっており，高齢者か低能力語であった場合はFキー，若者または高能力語だった場合はJキーを押すことで判断した。これらの課題では，高齢者と能力の低さ／若者と能力の高さを結び付けているほど，高齢者・高能力ブロックの反応時間が遅く，高齢者・低能力ブロックの反応時間が速くなる。このように二つのブロックの反応速度の差によって，高齢者・若者に対してどのようなイメージを持っているかを潜在的に測定することができる。

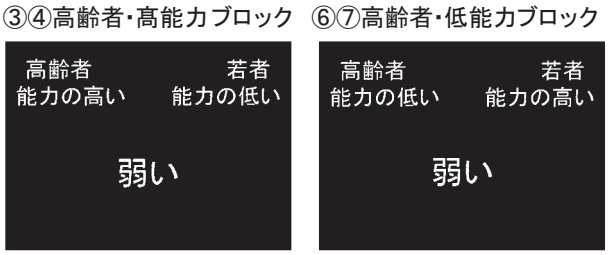

図1．能力IATの例

上記と同様の手順で，2つ目の人柄IATを行った。人柄IATの構成は能力IATとほぼ同様であり，低能力語を冷たさ関連語に，高能力語を温かさ語に入れ替えて実施した（付録のブロック⑧以降参照）。

事後アンケート　授業初回に行った事前アンケートと比較するため，人道主義－平等主義尺度および興味のある活動領域を再度訪ねた。また，授業全体への感想や参加者の属性に関する質問に回答を求めた。

結果と考察

受講生の特徴

事前調査に回答した44名のデータを分析した。

ボランティア経験　これまでのボランティア経験について尋ねたところ，小学校時は10名（20.8%），中学校時は18名（37.5%），高校時は21名（43.8%）が，ボランティア経験があると回答した。小・中・高校において一度でもボランティアを行った経験がある人は28名（63.6%）にのぼった。また，短大入学後から現在（短大2年）までに一度でもボランティアを行ったのは29名（65.9%）であった。小学校から現在までに一度でもボランティアを行ったのは39名（88.6%）であった。

小・中・高校でのボランティア経験の有無と，短大での活動の有無の関係を検討するため，クロス集計表を作成した（表3）。χ^2検定の結果，連関は見られなかった（$\chi^2(1)=0.09, ns$）。この結果は，教

表 3. ボランティア活動の経験と現在の活動状況

		短大での活動 なし	短大での活動 あり	計
小中高での経験	なし	5(31.3)	11(68.8)	16(36.4)
	あり	10(35.7)	18(64.3)	28(63.6)
	計	15(34.1)	29(65.9)	44

注．それぞれのセルにあてはまる人数を示した。
カッコ内はパーセンテージである。

育課程の中でのボランティア経験が必ずしもその後の活動を増加させるわけではないという荒川ら（2006）と一致した結果であった。

一方で，小中高短大というこれまでのボランティア経験を連続変量として扱った場合，ボランティア経験と事前調査における関心領域の数の間に正の相関が見られた（$r=.35, p<.05$）。すなわち，ボランティア経験があるほど，関心領域が多かった。こうした結果は，ボランティア活動の経験が援助規範意識を高めるという箱井・高木（1987）の結果とも符合するものであると考えられる。

これらの結果から，教育課程におけるボランティア活動の実践は，必ずしもその後の活動を即座に促進するわけではないが，援助意識を高める効果はあると解釈することができるかもしれない。実際，事前調査において，受講者の多くが，ボランティアに興味はあるが実践する場がなかったということを受講理由に挙げていることから，援助意識をボランティア活動という実践に結び付ける場を提供することが重要であると考えられる。

受講者の心理的特性　ボランティア論の受講者の心理的特性を探るため，事前調査における PVD 尺度の下位尺度である易感染性（$\alpha=.86$）および感染嫌悪（$\alpha=.68$）について，それぞれ逆転項目を処理し，平均値を算出した。ボランティア論の受講者と，非受講者の尺度得点を比較する対応のない t 検定を行った。その結果，易感染性はボランティア論受講者（$M=3.29, SD=1.28$）と非受講者（$M=3.31, SD=1.2$）の間に有意差は見られなかった（$t(121)=0.07, ns$）。他方で，感染嫌悪については，ボランティア論受講者（$M=3.26, SD=0.98$）の方が非受講者（$M=3.67, SD=0.85$）よりも感染嫌悪が有意に低かった（$t(121)=2.43, p<.05$）。

ボランティア活動は自分とは立場の異なった他者との相互作用が多い。そうした意味で，感染嫌悪が低い場合には，外集団成員との相互作用に抵抗を感じにくく，ボランティア論のような授業を受講しやすいと考えられる。他方で，感染嫌悪が高い場合には，ボランティア活動に抵抗を感じやすいだろう。そうした抵抗感はボランティアを実際に行うという本授業を履修する際の障壁になっていたと考えられる。

表 4. 関心のあるボランティア領域の変化

領域	事前 (N=44)	事後 (N=38)	変化量
環境	56.8	43.9	−12.9
子ども	63.6	65.9	2.3
まちづくり	43.2	41.5	−1.7
心理	20.5	29.3	8.8
文化	25.0	31.7	6.7
スポーツ	45.5	41.5	−4.0
国際	52.3	46.3	−6.0
社会福祉	34.1	22.0	−12.1
被災地支援	52.3	61.0	8.7
社会貢献	47.7	36.6	−11.1

注．「興味がある」と回答した割合（複数回答可）。
欠損値を除いた有効パーセンテージでの表記である。

また，人道主義－平等主義尺度について，平均値を算出し（事前 $\alpha=0.75$；事後 $\alpha=0.85$），対応のある t 検定によって事前得点と事後得点を比較した。その結果，事前（$M=3.64, SD=0.54$）と事後（$M=3.71, SD=0.61$）で有意差は見られなかった。このことから，ボランティア学習は平等主義的な意識については影響を及ぼさなかった。この尺度については，本授業を受講していない学生データを取得しておらず，比較をすることができない。そのため，こうした結果の理由として，ボランティア学習が平等意識の形成に影響を及ぼさなかったのか，それとも元々平等意識が高い人々が履修したために変化が表れにくかったのか，を特定することはできない。今後は，ボランティアを増やす方策を考える上でも，非受講生との比較を通して，ボランティア活動に興味を持つ者の心理的特性をさらに明らかにしていくことが求められるだろう。

関心領域の変化

参加者が活動領域として関心があると回答した割合を算出し，表 4 に示した。なお，割合を表記したのは，事前調査と事後調査で回答者数が異なるためであった。まず，事前調査の結果から，授業前に関心が持たれやすかった領域は，子ども（63.6%），環境（56.8%），国際，被災地支援（ともに 52.3%）であった。一方，事後調査では，事前と同様に子ど

も（65.9%）への関心が高いが，続いて被災地支援（61.0%）への関心が高まり，続いて国際（46.3%）となっていた。変化量に注目してみると，授業後にもっとも関心が増えたのは，心理領域であった。心理領域は事前調査ではもっとも関心の程度が低かったが，講義内でボランティア活動を心理的な観点から再考することや，他者への寄り添い方を講義したことが影響したと考えられる。また，それに続いて関心の程度が高まったのは，3 回にわたって講義した被災地支援であった。被災地支援については，元々の関心が高かったが，授業内で外部講師による講義を聞き，現状を知ることや，心理・物資両面からの援助の仕方を具体的に学ぶ中で関心が高まったと考えられる。

加えて，関心領域の数としての変化も検討した。すなわち，事前と事後で関心領域が増えるかを対応のある t 検定で検討したが，事前（$M=4.68, SD=2.10$）と事後（$M=4.30, SD=2.16$）に有意差はなかった（$t(36)=1.13, ns$）。

以上のように，活動領域の数としての変化は見られなかったものの，関心のある活動領域には変化が見られた。教育課程にボランティア活動を取り入れる上で，実際に活動する領域と学生の関心やニーズとのマッチングは看過できない点である。なぜなら，受講者の興味にあった活動内容を用意することは，その後の継続意図にも影響する重要な要因であると考えられるからである。しかし，実際には，学生が活動したことのある分野と興味のある分野は必ずしも合致していないという指摘もある（池田, 2003）。そこで，本授業では幅広い領域の活動を体験できるよう準備し，学生の選択した訪問先で活動をできるようにした。そのため，本研究の結果は，学生の関心領域は増えるのではなく，関心が深まったと解釈できるかもしれない[5]。一方で，事前調査ではもっとも関心が持たれていなかった心理領域の関心が授業後に高まったように，授業の中で新規な視点からボランティア活動を解釈することで，新たな関心の開拓にも繋がると考えられる。活動継続にとって，学習者の関心との一致は重要であるが，さらなる活動領域を提案することは 1 学期という十分な時間をかけて授業を行うからこそ実現できる点でもあろう。

[5] 実際，授業内において保育園で活動した 2 名の学生は，その後，三輪地区自治協議会の紹介により，地区の児童センターで小学生と触れ合うボランティアをはじめた。こうした授業後の活動継続は，長野市民新聞（2017 年 7 月 8 日付）においても取り上げられた。

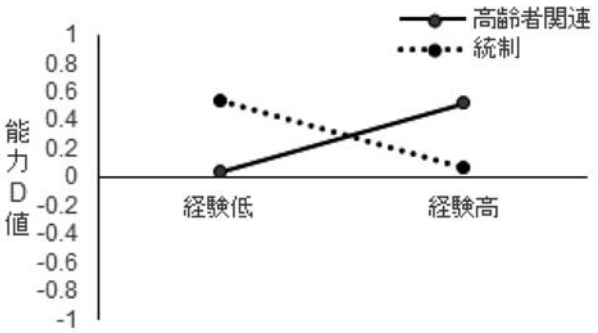

図 2. 能力 IAT の D 値

潜在的態度への効果

高齢者に対する潜在的態度が高齢者関連領域で活動したことで変わりうるのかを検討した。分析対象は，事前調査と IAT 課題の双方に参加した者で，IAT 課題を経験したことがある 1 名を分析から除外した 38 名であった。

デイ・サービス訪問および地区活動においては，高齢者と接する活動が多かったため，高齢者関連条件（19 名）とした。それ以外の活動先については，統制条件（19 名）とした（表 2 参照）。また，高齢者への態度に影響を及ぼす要因として，高齢者との同居経験およびボランティア経験を分析に含めた。現在同居している，および過去に同居していたと回答した場合を「同居経験あり」（22 名）に，全く同居経験がないと回答した場合を「同居経験なし」（16 名）とした。ボランティア経験は小学校から短大までの経験回数を単純加算した（$M=1.77, SD=1.27$）。分析に際して，訪問施設および同居経験はエフェクトコーディングし，ボランティア経験については標準化した値を使用した。

Greenwald, Nosek, & Banaji（2003）を参考に，IAT のカテゴリ間の連合の強度を示す値である D 値を算出した。能力 IAT においては，D 値が高いほど，高齢者－低能力・若者－高能力の連合が強いことを意味するように算出した。また，人柄 IAT では，D 値が高いほど，高齢者－冷たさ・若者－温かさの連合が強いことを意味するように算出した。

能力 IAT の D 値に対して，訪問施設（高齢者関連／無関連），同居経験（なし／あり），ボランティア経験（連続量）の主効果および二次の交互作用を投入した一般線形モデルによる分析を行った。その結果，訪問施設×ボランティア経験の交互作用のみが有意であった（$F(1, 31)=4.33, p<.05$；図 2 参照）。そこで，下位検定を行ったところ，ボランティア経験が少ない場合（－1SD），統制条件（$M=0.53, SE=0.25$）と高齢者関連条件（$M=0.04, SE=$

0.17）に有意差はなかった。他方，ボランティア経験が多い場合（＋1SD），統制条件（$M=0.07, SE=0.16$）よりも高齢者関連条件（$M=0.52, SE=0.19$）の方がD値が高い傾向があった（$p=.089$）。この結果は，ボランティア経験が豊富で高齢者関連の活動をした場合に，高齢者と能力の低さ／若者と能力の高さを結び付けていることが示された。

人柄IATのD値に対しても同様の一般線形モデルによる分析を行ったところ，ボランティア経験の主効果のみ有意傾向であった（$F(1,31)=3.06, p=.09$）。ボランティア経験が多い場合（$M=0.24, SE=0.15$）は経験が少ない場合（$M=-0.12,, SE=0.16$）よりもD値が高かった。すなわち，ボランティア経験が多いほど，高齢者と冷たさ／若者と温かさを結び付けていることが示された。

IATは若者と高齢者の相対的なイメージを測定しているため，結果の解釈には慎重を期す必要がある。まず，こうした結果になった理由として，高齢者への認知が変化した可能性がある。すなわち，ボランティア経験が多く，高齢者施設を訪問した人々において，高齢者は弱いという認知が強まり，守るべき対象としての高齢者観が生じやすくなった可能性がある。一般的に能力が低いという認知は否定的なイメージと捉えられるが，積極的な援助を引き出しやすいという指摘もあり（BIASmap; Cuddy, Fiske, & Glick, 2008），一概に否定的な認知を結び付けているとはいえない。今回測定したのは，あくまで認知（ステレオタイプ）であるため，エイジズムに結びつくような否定的な感情（偏見）とは区別して捉える必要があるだろう。IATでは，あくまでも記憶表象における連合を測定しているので，今後は，ボランティア活動が高齢者への好悪などの感情にどのような影響を及ぼすのかを測定する必要があるだろう。

IAT得点は，高齢者に対する能力のなさの認知を反映している一方で，若者に対する能力の高さの認知も反映している。そのため，今回のIAT得点の高まりは，高齢者に対する無能さの認知が強まったことを反映したのではなく，若者に対する有能さの認知の強まりを反映した可能性もある。ボランティア活動をこれまで経験してきた結果，高齢者との接し方も心得ており，より自分が高齢者を援助でき，能力が高いという認知になったのかもしれない。また，そうした解釈は人柄IATの結果とも一致していると考えられる。すなわち，ボランティア経験が多いほど，他者への援助を行ってきたため，自分自身を温かいと認知している可能性があるだろう。こうした自己認知の肯定的な変化はボランティア活動の継続にも繋がりやすいと考えられる。

今後は，高齢者イメージをより詳細に検討するために，高齢者－若者という対比によるIATではなく，高齢者のみのシングルカテゴリIAT（Karpinski & Steinman, 2006）を実施することも有用だろう。また，受講前の事前の潜在的態度を測定することで，ボランティア活動後の変化を捉えることができるだろう。

おわりに

本研究は，ボランティア活動を行う授業を履修する学生の特性を明らかにすること，およびボランティア活動が学生のさまざまな社会意識にどのような影響を及ぼすのかを検討した。授業上の制約もあり，結果の解釈には慎重を要する部分がある。例えば，本研究は短期大学の学生を参加者としている関係上，女性の比率が高くなっていた。本調査では，子どもに関するボランティア領域の関心が最も高かったが（表4参照），総務省の調査（2016）においても，男性に比べて女性の方が子どもを対象としたボランティア活動の行動者率が高かった。先述したように，ボランティア活動の継続には，ボランティア自身が興味のある分野で活動を体験することが重要である。そのため，本研究の結果を一般化する際には，こうしたジェンダーによる選好の差異に注意を払うことが必要である。

以上のような限界点はあるものの，本調査の結果はボランティア活動を教育活動として行うことの意義に示唆を与えたと考えられる。まず，受講者の特徴を把握することで，どのような人が主体的にボランティア活動を行っているか，あるいは，どのような点を学生に促すことが活動参加につながるかを考えることができる。例えば，小中高におけるボランティア活動の体験は，その後のボランティアの経験を促進しなかったが，援助意識は高めていたと推測できる。こうしたことから，小中高においてどのような活動であれば，援助意識だけでなく，実際の活動に結びつくのかをさらに詳細に検討することが求められる。可能性の一つとして，小中高における体験が学生の関心領域に沿ったものであった場合には，その後の活動を促進する効果があるかもしれない。そうした意味で，関心領域およびその変化の様態を明らかにすることは，どのような特徴をもつボランティアに関心がもたれるのか，またどのような実践がボランティア意欲の向上につながるかを見出すために役立つ。今後は過去のボランティア体験に対す

る学生の満足度や評価などを含めて検討することが有益だと考えられる。

加えて，本研究では，IAT を用いて高齢者ステレオタイプを測定した。ボランティア活動を授業内で行うことの教育的効果はいくつかの研究で議論されているものの（e.g., 荒川ら, 2006；妹尾, 2008），その効果の測定には社会的望ましさの影響を排除することが困難な部分もある。潜在的認知を含め，社会的認知研究の手法を導入することは，実際には測定することが難しいボランティアの効果を明らかにすることにも応用できる可能性がある。本研究はボランティア活動の効果測定に潜在的指標を用いた先駆的な研究である一方で，先行研究が少なく，データの蓄積が今後の課題であろう。本研究の知見をもとに，より精緻化されたボランティア効果の測定と授業実践の検証が必要となる。

付記　本授業の取り組みは，以下の新聞において取り上げられた。

信濃毎日新聞　2017 年 8 月 25 日『踏み出す，寄り添うボランティア：ボランティアを学ぶ県短大の学生』

長野市民新聞　2017 年 4 月 11 日『ボランティアを実践：県短が授業で』, 2017 年 5 月 30 日『三輪地区の取り組み学ぶ』, 2017 年 7 月 8 日『県短生，児童と交流』

引用文献

Allport, G.W. (1954). *The nature of prejudice. Reading*, MA: AddisonWesley

荒川裕美子・保住芳美・吉田浩子（2006）．小・中・高等学校におけるボランティア体験と大学生のボランティア観の関連　川崎医療福祉学会誌, **16**, 133-139.

Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the BIAS map. *Advances in Experimental Social Psychology*, **40**, 61-149.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.

藤原佳典・渡辺直紀・西真理子・李相侖・大場宏美・吉田裕人・佐久間尚子・深谷太郎・小宇佐陽子・井上かず子・天野秀紀・内田勇人・角野文彦・新開省二（2007）．児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因 “REPRINTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から　日本公衆衛生雑誌, **54**, 615-625.

福川康之・小田亮・宇佐美尋子・川人潤子（2014）．感染脆弱意識（PVD）尺度日本語版の作成．心理学研究, **85**, 188-195.

Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.

Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.

箱井英寿・高木修．（1987）．援助規範意識の性別，年代，および，世代間の比較 社会心理学研究, **3**, 39-47.

Inquisit 4 [Computer software]. (2015). Retrieved from http://www.millisecond.com. Millisecond Software.

石井国雄・宇賀神博（2014）．ムードが高齢者に対する潜在的評価に及ぼす効果の検討　武蔵野大学通信教育部研究紀要人間学研究論集 **3**, 1-11.

Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 16-32.

Katz, I., & Hass, R. G. (1988). Racial ambivalence and American value conflict: Correlational and priming studies of dual cognitive structures. *Journal of Personality and Social Psycho1ogy*, **55**, 893-905.

Levy, S. R. (2016). Toward Reducing Ageism: PEACE (Positive Education about Aging and Contact Experiences) Model. *The Gerontologist*, **116**, 1-7.

内閣府（2017）．平成 29 年版高齢社会白書

日本私立大学連盟（2015）．私立大学学生生活白書

沼崎誠・小野滋・高林久美子・石井国雄（2006）．Sequential Priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究　東京都立大学人文学報, **369**, 21-52.

岡本栄一（2005）．ボランティアのすすめ：基礎から実践まで　ミネルヴァ書房

Park, J. H., Schaller, M., & Crandall, C. S. (2007). Pathogen-avoidance mechanisms and the stigmatization of obese people. *Evolution and Human Behavior*, **28**, 410-414.

Schaller, M., & Duncan, L. A. (2007). The behavioral immune system: Its evolution and social psychological implications. In J. P. Forgas, M. G. Haselton, & W. von Hippel (Eds.), *Evolution and the social mind: Evolutionary psychology and social cognition*. New York: Psychology Press. pp. 293-307

妹尾香織．（2008）．若者におけるボランティア活動とその経験効果　花園大学社会福祉学部研究紀要, **16**, 35-42.

総務省（2016）．平成 28 年度社会生活基本調査結果（総務省統計局）

高史明・雨宮有里（2013）．在日コリアンに対する古典的／

現代的レイシズムについての基礎的検討 社会心理学研究，28, 67-76.
田尾雅夫（2001）．ボランティアを支える思想：超高齢社会とボランタリズム　すずさわ書房

（平成 29 年 9 月 25 日受付、平成 29 年 12 月 8 日受理）

付録　IAT の手続き

ブロック	左に分類（F キー）	右に分類（J キー）
①高齢者若者判断	高齢者関連語	若者関連語
②能力判断 a	高能力語	低能力語
③高齢者・高能力判断（練習）	高齢者または高能力語	若者または低能力語
④高齢者・高能力判断（本番）	高齢者または高能力語	若者または低能力語
⑤能力判断 b	低能力語	高能力語
⑥高齢者・低能力判断（練習）	高齢者または低能力語	若者または高能力語
⑦高齢者・低能力判断（本番）	高齢者または低能力語	若者または高能力語
⑧人柄判断 a	温かさ語	冷たさ語
⑨高齢者・温かさ判断（練習）	高齢者または温かさ語	若者または冷たさ語
⑩高齢者・温かさ判断（本番）	高齢者または温かさ語	若者または冷たさ語
⑪人柄判断 b	冷たさ語	温かさ語
⑫高齢者・冷たさ判断（練習）	高齢者または冷たさ語	若者または温かさ語
⑬高齢者・冷たさ判断（本番）	高齢者または冷たさ語	若者または温かさ語

※②～④と⑤～⑦の 3 ブロックのいずれを先に行うかについては、参加者間でカウンターバランスをとった。
同様に，⑧～⑩と⑪～⑬の 3 ブロックの実施順序もカウンターバランスした。また，刺激項目はすべてのブロックにおいてランダムな順序で呈示された。